

て獄に投ぜられ、後許さる。明治元年九月死。年五十二。後從五位を贈らる。【二五】

【ナ行】

ナ

内藤豊後守

名は正繩、信濃岩村田侯。實は水野忠光の第二男。入りて内藤氏を嗣ぎ、享和三年間三月家督を承く。萬延元年二月死。【二、七八、八〇、九〇、九七】

内藤正繩

彼理來航及其當時、朝幕背離緒篇、安政條約緒結、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。【六八、六九】

中井竹山

松平定信時代、幕府實力失墜時代篇掲出。【八七】

中根師質

雪江に同じ。彼理來航及其當時、公武合體、朝幕背離緒篇、朝幕交渉篇

長野主膳
義言に同じ。【五五、五六、五七、七〇、九〇】
朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。【二、六、一四、四三、五三、五四、五六、五七、六〇、七六、七八、八一、八六、九三、九四】
朝幕交渉篇、井伊直弼執政時代篇掲出。【二九、四二、六二】

長野義言

朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。【二九、四二、六二】

中山忠能

忠能に同じ。【九六】

中山中納言

二條大納言
二條齊敬
仁孝天皇
野々山鉢藏

二條齊敬に同じ。【五四、九六】
朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。【六二、六三、六四】
朝幕交渉篇掲出。【一六】

中山忠能

忠能に同じ。【九六】

中山中納言

二條大納言
二條齊敬
仁孝天皇
野々山鉢藏

平山謙二郎

日露英蘭條約緒結、朝幕背離緒篇、朝幕交渉篇掲出。【二六、三〇】

廣瀬淡窓

神奈川條約緒結、日露英蘭條約緒結、朝幕背離緒篇、朝幕交渉篇、井伊直弼執政時代篇掲出。【二】

橋本左内

日露英蘭條約緒結、朝幕背離緒篇、朝幕交渉篇掲出。【二六、三〇】

蜂須賀齊裕

父桃秋、祖月化共に俳文を以て著する。長じて龜井南溟に従ひ學び、郷に歸りて家業の農商と郡代所諸藩用達の業を弟久兵衛に譲り、自ら家塾を開き諸生を教授し、成宜園といふ。姓氏帶刀を許す。大村府内兩藩主また教へを乞ふ。安政三年十一月死す。年七十五。著書遠思樓詩妙其他若干卷あり。大正四年正五位を贈らる。【一九】

一橋慶喜

天保改革、彼理來航以前の形勢、神

東坊城聰長

被理來航及其當時、神奈川條約緒結、

ヒ

奈川條約締結、公武合體、朝幕交渉
緒篇、安政條約締結、朝幕交渉、井
伊直弼執政時代篇掲出。【二八、八二、
一一〇】

廣橋光成

朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。
【六、一二、六四、六六】

廣橋大納言

光成に同じ。【三一、四一、四三、六五】

フ

伏見官貞敬親王

邦頼親王御子。母は松木大納
言宗美の女。安永四年十二月生る。

寛政九年八月親王宣下、元服して上
野大守となる。十年六月三品に叙す。
文化元年正月兵部卿に任す。二年九
月二品に叙す。天保十二年正月一品
に叙しついで薨す。【一七】

藤田幽谷

幕府分解接近時代、雄藩篇、天保改
革篇、幕府實力失墜時代、彼理來航

藤田東湖

朝幕交渉篇掲出。【一】

細川越中守

松平定信時代、幕府分解接近時代篇
掲出。【八八】

堀田正陸

井伊直弼執政時代篇掲出。【四一】
天保改革、彼理來航及其當時、孝明
天皇初期世相、公武合體、朝幕交渉、井
伊直弼執政時代篇掲出。【三、六、七、
八、九、三五、八五、一〇五、一〇六】

堀田備中守

正陸に同じ。【四一、六三】
堀田仲左衛門の子。初め徳之助、又十郎などと
稱す。藩主齊興に從ひ、江戸に祇役

以前の形勢篇掲出。【一】
彼理來航以前の形勢、彼理來航及其
當時、孝明天皇初期世相、公武合體、
朝幕交渉篇掲出。【一】

ホ

保科正之

松平定信時代、幕府分解接近時代篇
掲出。【八八】

堀田正陸

井伊直弼執政時代篇掲出。【四一】
天保改革、彼理來航及其當時、孝明
天皇初期世相、公武合體、朝幕交渉、井
伊直弼執政時代篇掲出。【三、六、七、
八、九、三五、八五、一〇五、一〇六】

堀田備中守

正陸に同じ。【四一、六三】
堀田仲左衛門の子。初め徳之助、又十郎などと
稱す。藩主齊興に從ひ、江戸に祇役

フ

松平大學頭

井伊直弼執政時代篇掲出。【一二、一
三、五九】

松平忠固

彼理來航以前の形勢、彼理來航及其
當時、神奈川條約締結、孝明天皇初
期世相、公武合體、朝幕交渉、井伊直弼
執政時代篇掲出。【六、七、一〇五、一〇
六】

松平丹波守

戸田氏、信州松本藩主。名は光則、
弘化二年十月家を嗣ぐ。維新の際王
事に盡し、賞典祿三千石を與へらる。
明治二十五年十二月死。【七七】

松平乘全

彼理來航及其當時、神奈川條約締結、
公武合體、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。【四、
一〇七、一〇八】

松平播磨守

井伊直弼執政時代篇掲出。【一二、一
三、五九】

マ

松平和泉守

彼理來航及其當時、神奈川條約締結、
公武合體、安政條約締結、朝幕交涉
篇掲出。【九八】

彼理來航及其當時、朝幕交渉、井伊直
弼執政時代篇掲出。【一三、五九】

近世日本國民史 人物概覽

二五

松平慶永

幕府分解接近時代、孝明天皇初期世相、公武合體、朝幕背離緒篇、安政條約締結、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇【四、一〇、二五、三九、七二、七四、八三、九七、一〇八】

松平頼胤

松平説岐守に同じ。彼理來航及其當時、朝幕背離緒篇【一〇、一三、四九、七〇、一〇五】

松平頼聰

頼胤の養子。文久元年七月家を繼ぎ、譖岐守と稱し少將に任す。明治三十一年十月死す。夫人千代子は井伊直

松平頼繩

松平頼誠 大學頭に同じ。【一三】

萬里小路正房

朝幕交渉篇、井伊直弼執政時代篇【六、一一、一二、三六、四一、四三、四五、六三、六四、六五、六六】

萬里小路大納言

正房に同じ。【三一、四一】

間部下總守
詮勝

詮勝に同じ。【三、四〇、四九、五二、五八、六一、七二、七四、八五、九八】

公武合體、井伊直弼執政時代篇【二、三、四、七、八、九、一一、一三、二六、二九、三一、三二、三九、四一、四七、五七、五八、六〇、六三、六六、六七、六八、七二、七四、七六、七七、八二、八六、八七、八九、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六】

ミ

三浦七兵衛

名は吉信、後柳齋と改む。若き時より藩主忠義に侍す。安政五年忠義の所司代となるや從つて上京し、有志の間に往來し、國事に奔走す。文久元年和宮降嫁にも功あり。二年五月朝命により江戸に出て諸方に斡旋す。三年二月退隠謹慎、ついで赦さ

間部詮勝

詮勝に同じ。【三、四〇、四九、五二、五八、六一、七二、七四、八五、九八】

公武合體、井伊直弼執政時代篇【二、三、四、七、八、九、一一、一三、二六、二九、三一、三二、三九、四一、四七、五七、五八、六〇、六三、六六、六七、六八、七二、七四、七六、七七、八二、八六、八七、八九、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六】

水野忠邦 朝幕交渉篇【八一、九一】
文政天保時代篇以下安政條約締結篇に至るまで各篇【三、九〇】

水野忠央 公武合體、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇【一三、一四】

水野忠央に同じ。【五九、一〇五】

水野忠央の第十一子。幼名鶴千代丸。慶長十一年九月四歳の時常陸下妻の地十萬石を賜ひ、十四年正月正五位下左衛門督に敍任し、十二月水戸城に移り、二十八萬石を領す。十六年三月元服を加へ、從四位下少將に進み、元和六年參議を経て正四位下左中將に陞り、寛永三年八月從三位權中納言となり、四年正月正三位に移り、

近世日本國民史 人物概覽

明治天皇

彼理來航以前の形勢、公武合體、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇【二〇、一一、一二、一五、四二、四六、四七、四九、五〇、五一、五二、五八、五九、七一、七五、一〇五】

毛利慶親
彼理來航及其當時、井伊直弼執政時
代篇掲出。〔四一〕

【ヤ行】
ヤ

梁川星巖

安政條約締結、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。〔一八、一九、二〇、二一、二五、六〇、七七、七八、七九、八三、八四、八五、八六、八七、八九、九〇、九一、九二、一〇九〕

山縣半藏

後の宍戸磯なり。山口藩士安田直記の第三子。文政十二年三月生る。始め備後と稱す。後同藩の宍戸觀基の養嗣子となり、明治維新の際勤王の事に奔走す。明治三年十月刑部少輔となり、ついで司法大輔、文部大輔等となる。十年元老院議官に任じ、

山口丹波守
山崎闇齋

十二年特命全權公使となり、支那に赴く。後宮内省出仕となる。十七年子爵を授けらる。後貴族院議員に勅選せらる。〔八二、九八、九九〕
名は直信、内匠と稱す。天保十五年九月目付となり、弘化四年十一月小普請組支配に遷る。嘉永元年日光奉行となり三年九月山田奉行に轉す。安政五年正月普請奉行に任じ、同年六月大目付となる。ついで十月西丸留守居に移る。六年二月勘定奉行公事方に任ず。萬延元年十二月再び大目付に任じ、文久二年六月小姓組番頭となる。同年八月隠居す。〔一三〕松平定信時代、幕府實力失墜時代、孝明天皇初期世相篇掲出。〔六、二二〕公武合體安政條約締結、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。〔九七、九八〕

山内豊信

山本貞一郎

近藤茂左衛門の弟、信州松本人。
名は弘素。長じて同國伊那郡山本村久保田某の養子となる。兄と共に京都に寓す。常に皇室の式微を慨き四

吉田寅次郎
【ラ行】
ラ

八三】

松陰に同じ。〔八六〕

賴山陽

松平定信時代、幕府分解接近時代、雄藩、文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代、孝明天皇初期世相篇掲出。〔一九〕

賴三樹三郎
賴三樹八郎

朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。〔一八、一九、二〇、二一、二五、八九〕

林子平
【ワ行】
ワ

朝幕交渉篇掲出。〔八七〕

吉田松陰

神奈川條約締結、孝明天皇初期世相、安政條約締結、朝幕交渉、井伊直弼執政時代篇掲出。〔二〇、二一、八二、七〕

近世日本國民史 人物概覽

脇坂安宅

彼理來航以前の形勢、神奈川條約締結、日英蘭條約締結、公武合體、朝幕交渉篇掲出。〔二〇〕

索引

ア行

安藝	一八六
東橋	四〇
阿波	一八六、四五〇
栗田山	四二
逢阪山	四二
亞墨利加	一四〇
美理哥	九三
綾部	九三
暗夷	四九二、四九三
伊賀	一

ウ

上野宮	一
浦賀	一
字和島	四五〇、四六三
越前	五、一六〇、一八六、一九〇、三六六、四三六、四五八、四四九、四五〇、四五九、四五三、一二
越前鰐江	一一
越前福井	九三、四五四

近世日本國民史 索引

1

江戸
五、二、三、四、三七、七四、八七、八八、八九、九一、九六、一〇
八、一一、一一七、一三〇、一三七、一八二、一八七、一九二、一三
四〇〇、二三五、三三〇、二三二、二四八、二四九、二五〇、二七一、二八
二八一、二八七、二八九、二九二、二九五、三〇一、三〇五、三五
三六〇、三六二、三七一、三七三、三八九、三九〇、四〇三、四〇五
四一九、四五三、四五八、四九八、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八
七〇〇、三六〇、三六二、三七一、三七三、三八九、三九〇、四〇三、四〇五
四八三、四八四、四九八、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九
二六五、二六六、二八六、三〇九、三〇
八、三〇九、三三一、三三二、三三三、三三四

卷之三

卷六

力行

江戸	五、三、三、三四、三七、七四、八七、八八、八九、九一、九六、一〇八、一一、一一七、一三〇、一三七、一八二、一八七、一九二、二〇〇〇、二二五、二三〇、二三三、二四八、二四九、二五〇、二七一、二八〇〇、二八一、二八七、二八九、二九二、二九五、三〇一、三〇五、三五〇、三六〇、三六二、三七一、三七二、三八九、三九〇、四〇三、四一九、四五三、四五八、四六二、四六五、四七三、四七六、四七七、四八三、四八四、四九八、五〇五、五〇六
江戸側	二六五、二六六、二八六、三〇九、三〇八、三〇九、三一三、三三五、四七二
江戸近海	一四三
江戸城	三六三
江戸邸	二八〇
小濱	三一、九五
小濱藩	九六、一二六、二九〇
尾張	一六〇、一八一、一八六、一九〇、二七七、三八六、四九四
尾張侯	一九二
大垣藩	九三
大坂	一二、四四、八三、八四、一一三、一二四、四一三、四五八、四五九、四六一、四六五

大坂御屋敷	一	四七三
大坂御留守居	一	四七三
大津	九五、一三〇、二四六、四一五、四一九、四三四、四三五	四七三
大津驛	一	四六一
大野	一	四六一
俄羅	一	四六一
江州	一	八九
江府	一	三一
江門	一	四〇七
加賀	一	一八六
懸川	一	四八五
掛川	一	四九五
鹿兒島	一	一二四
神奈川	三六、三八、二〇九、三九四、三九八	三九三
神奈川條約	一	三九三

七

京都所司代	MOX、MOK、MOK
京都青蓮院宮	MOX、MOK、MOK
京都留守居	MOX、MOK、MOK
玉池吟社	MOX、MOK、MOK

紀州 ······ 二七
木曾街道 ······ 大井
木曾路 ······ 二八三、四大口

京師

京都

小石川

三〇七、三〇八、三三三、亮八

近世日本國民史 索引

近世日本國民史 索引

四

小金驛 二〇

小がね驛 一七

小金宿 一八

駒込 一九

駒込邸 一九

駒込御下屋敷 一九

下谷 一八

四條の郷手 一八

支那 一九

品川驛 一九

芝御邸 一九

下諭訪驛 一九

下田 三五、三六、一〇一、三九六、三九七、四二

信州岩村田 三六

信州松代藩 三六

信州松本 三六

水城 三六

水府 三六

住吉 三六

住吉龜林寺 三六

諭訪驛 三一八、三三一

【サ行】
サ

霜田 四一、四二

佐賀 一八六、四二六

堺 一八六、四二六

薩摩 一八六、四二六

薩摩湯 一八六、四二六

鮫江 一八六、四二六

鮫江侯 一八六、四二六

澤山城 一八六、四二六

諭州 一八六、四二六

シ

下谷 一八

四條の郷手 一八

支那 一九

品川驛 一九

芝御邸 一九

下諭訪驛 一九

下田 三五、三六、一〇一、三九六、三九七、四二

信州岩村田 三六

信州松代藩 三六

信州松本 三六

水城 三六

水府 三六

住吉 三六

住吉龜林寺 三六

諭訪驛 三一八、三三一

四

小金驛 二〇

小がね驛 一七

小金宿 一八

駒込 一九

駒込邸 一九

駒込御下屋敷 一九

下谷 一八

四條の郷手 一八

支那 一九

品川驛 一九

芝御邸 一九

下諭訪驛 一九

下田 三五、三六、一〇一、三九六、三九七、四二

信州岩村田 三六

信州松代藩 三六

信州松本 三六

水城 三六

水府 三六

住吉 三六

住吉龜林寺 三六

諭訪驛 三一八、三三一

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

關ヶ原 四三

仙洞御所 四三

關ヶ原 四三

【夕行】

夕

中國路 八八

シ

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

津 八八

築地 八八

津 八八

【夕行】

夕

鼠峠

八

レ

磯邸

三四

魯西
魯西亞
露西亞
魯西亞船

一五
一四
一四
一四二、一四三
一五
一四
一四二

六角の牢屋敷
和田宿

四三七、四六六
三三三

ワ行

ロ

和田宿

三三三

昭和七年七月二十日 印刷
昭和七年七月二十五日 発行
近世日本國民史 安政大獄前篇並製
定價貳圓五拾錢

著者 德富猪一郎

發行兼
印 刷 者 矢野國太郎

東京市京橋區銀座

發行所 東京市京橋區銀座
西八丁目九番地 民友社

電話銀座
一(57)
三四二
一四三
〇〇〇
〇〇〇

刷印社民・座銀京東

民友社出版目録

伯爵 東伏見邦英閣下著

寶雲抄

和田三造畫伯裝幀 表紙見返扉木版刷菊判豪華本

本文三六六頁 寫眞版一九枚 コロタイプ版八枚

本文刷込寫眞版多數

定價 參圓五拾錢

書留送料卅三錢

臣籍に御降下遊ばされ、一家を御創立になつた東伏見
邦英伯爵閣下の著『寶雲抄』を、弊社より出版するの
光榮に浴した。本書は、伯爵閣下が皇族であらせられ
た時代、奈良を中心古建築、古佛像の御研究、御印
象、御思想等を、明徹高雅な文章で御記述遊ばされた
もので、實に丹精をこめた佛教美術の研究記録で
あり、同時に興趣無盡藏的一大長詩である。

東京市京橋區銀座西八丁目

電話 銀座二二三〇〇〇〇
振替 東京一三一〇〇

新成簣堂叢書

部珍新成簣堂叢書は徳富成簣堂文庫に所蔵する天下稀観の

書成簣堂叢書は徳富成簣堂文庫に所蔵する天下稀観の

何れも僅か三百を限る。

聽雨紀談

和装 美濃判
定價 參圓五拾錢
荷造送料共廿錢

貧人太平記

和装 美濃判
定價 參圓五拾錢
荷造送料共廿錢

新撰和歌論語

和装 美濃判
定價 參圓五拾錢
荷造送料共廿錢

明惠上人臨終記

和装 美濃判
定價 參圓五拾錢
荷造送料共廿錢

日本書籍總目錄

和装 美濃判
定價 參圓五拾錢
荷造送料共廿錢

和装 美濃判
定價 參圓五拾錢
荷造送料共廿錢

史記水經

(31) (30) (29) (28) (27) (26) (25) (24) (23) (22) (21)

吉宗時代篇
寶曆明和篇
田沼時代篇
松平定信時代篇
幕府分解接近時代篇
雄藩篇
文政天保時代篇
天保改革篇
幕府實力失墜時代篇
彼理來航以前の形勢
彼理來航及其當時

以 (41) (40) (39) (38) (37) (36) (35) (34) (33) (32)

神奈川條約締結篇
日露英蘭條約締結篇
孝明天皇初期世相篇
公武合體篇
朝幕背離緒篇
安政條約締結篇
朝幕交渉篇
井伊直弼執政時代
安政大獄前篇
安政大獄中篇
上定價上製各冊金五
並製各冊金貳圓五拾錢
十四錢各冊送料各
廿二錢各冊送料各

近世日本の思想

(10)(9)(8)(7)(6)(5)(4)(3)(2)(1)

以 (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11)

上家康時代	中家康時代	下家康時代	大關	阪原役
卷	卷	卷	篇	篇
家康時代概觀	家康時代概觀	家康時代概觀	國	役
篇	篇	篇	制	役
篇	篇	篇	想	役
篇	篇	篇	思	役
篇	篇	篇	政	役
篇	篇	篇	義	役
篇	篇	篇	士	役
篇	篇	篇	治	役
篇	篇	篇	世	役
元祿時代	元祿時代	元祿時代	世	役
卷	卷	卷	相	役
上定價	上定價	上定價	元祿享保中間時代	役
並製各冊金五圓 十送廿料 四料各銀各	並製各冊金五圓 十送廿料 四料各銀各	並製各冊金五圓 十送廿料 四料各銀各	篇	役

蘇峰先生古稀記念帖

定價七圓

荷造送料共六拾錢

蘇峰先生
古稀祝賀
知友新稿
實費賣價一
書留送

實費賣價 拾 圖

菊二倍判（縦一尺二分、横七寸五分）
用紙上質紙 精巧玻璃版印刷 八十八枚
解説印譜年譜等七十頁 大和綴軸入大冊子
今年を以て徳富蘆峰先生には古稀の壽を迎へられました。茲に我等同人は其の記念事業の一として、曩に青山會館に於て記念展覽會を開き、先生が五十餘年間に於ける著作、原稿、書牘並に筆蹟に關するものを各時代別に陳列して、大方諸賢の觀覽に供しました。然るに畏くも高松宮同妃兩殿下を始め久邇宮、東久邇宮、東伏見宮大妃、李王各殿下の台臨を辱うし、其他江湖諸名士多數の來觀を得、會期中殆ど立錐之地なき盛況を極めました。是に於て同人胥謀り、出陳中の主なるものを選集して之を撮影刊行いたしました。此帖に收むる所のものは、先生の勞作の萬分一に過ぎませぬが、仔細に之を展檢すれば先生の七十年間に於ける進退行藏如何を知り得るばかりでなく、亦た先生の外傳として之を觀ることが出來やうと思ひます。發行部數に限りあり、再版不可能に付、迅速に御申込を願ひます。

菊版上製 千二百餘頁 原色寫眞版 十一枚
コロタイプ十五枚 寫眞網版七枚 凸版一枚

知友新稿は蘇峰先生の七十の壽を祝する爲、先生の
知友約百大家が、最も得意とする新しき作物を發表し
たる書籍である。

試に内容の一を語れば、卷頭には最近臣籍に降下
せられたる東伏見伯爵閣下の御文章があり、また西園
寺公爵・清浦・東郷・田中伯爵・盡澤・石黒子爵・益
田男爵等當代長壽の方々の題字があり、横山大觀、竹
内栖鳳、河合玉堂、平福百穂、橋本關雪畫伯等十數大家
の繪畫があり、大谷光瑞、内藤湖南、三上參次、三浦
周行、黒板勝美、小泉策太郎、新村出、木下歪太郎氏
等數十大家の作物があり、又新聞雜誌界に於ける名士
の文章がある。其他詩人の詩、歌人の歌、蘇峰先生に
關する詩歌感想文等あり、眞に百花一時に競ひ咲くの
面影がある。換言すれば、日本帝國名士大家の内、苟
も筆を執り得る人士の標本的作物は、本書一部に網羅
し盡されたといふも過言ではあるまい。

日本帝國の一轉機	八〇	國民小訓	八〇	蘇峰德富一猪郎著	
中庸之道	五〇	奉公小訓	五〇	持身小訓	五〇
大和民族の醒覺	五〇	家庭小訓	五〇	處世小訓	五〇
現代日本と世界の動き	五〇	小訓	五〇	送定料價	五〇
人さまざま	五〇	訓	五〇	送定料價	五〇
大正の青年と帝國の前途	五〇	送定料價	五〇	送定料價	五〇
時務一家言	五〇	送定料價	五〇	送定料價	五〇
靜思餘錄	五〇	送定料價	五〇	送定料價	五〇
景仰と自省	五〇	送定料價	五〇	送定料價	五〇
昭和一新論	六〇	送定料價	六〇	送定料價	六〇
元田先生進講錄	四〇	送定料價	四〇	送定料價	四〇

著郎一猪富德峰蘇

臺灣史亭獨隨記語筆
送定料價
一五二〇

(6)(5)(4)(3)(2)(1)
蘇峰隨筆
送定料價
一五二〇

人書好名皇室と國民
物書山遊
送定料價
一五二〇

錄興題治記民

蘇峰叢書

各冊送定料價五拾錢

全十二冊完成

わ卓精烟霞勝遊記卷上
精神の復興
送定料價
一〇一四〇

(12)(11)(10)(9)(8)(7)
讀書關言關東探勝
西遊
送定料價
一五一四〇

新國民的教
記者與新聞
步記聞養錄記
送定料價
一五一四〇

著郎一猪富德峰蘇

西鄉南洲先生	大久保甲東先生	木戸松菊先生	吉田松陰	賴山陽	人間山陽と史家山陽	赤穂義士觀	時勢と人物	歴史の興味	修史餘課
送定料價二一〇四〇	送定料價二一〇四〇	送定料價二一〇四〇	送定料價二一〇四〇	送定料價一八〇四〇	送定料價一八〇四〇	送定料價一八〇四〇	送定料價一八〇四〇	送定料價一八〇四〇	送定料價一八〇四〇
六四〇									

史境遍歷	維新回天史の一面	時代と女性	土佐の勤王	老記者叢話	人間界と自然界	新回天の偉業に於ける水戸の功績	三十七八年役と外交	生活と書籍	書窓雜記
送定料價三八〇	送定料價二八〇	送定料價一五〇	送定料價一六〇	送定料價一〇八〇	送定料價一四〇	送定料價一〇八〇	送定料價一〇六〇	送定料價一〇八〇	送定料價一〇四〇
二一〇	二一〇	一五〇	一六〇	一〇八〇	一四〇	一〇八〇	一〇六〇	一〇八〇	一〇四〇

岩倉具視公

蘇峰德富猪一郎編述

農學博士小野武夫著

中島九郎述

送定料價

六〇

思不自然と人出生
名出婦の歸記

古今世界

澆好蘇峰

蘆花德富健次郎著

送定料價

一〇〇

賴山陽書翰集

好蘇峰木崎光吉元次郎共編

送定料價

一〇〇

賴山陽書翰集

好蘇峰木崎光吉元次郎共編

送定料價

一〇〇

村の辻を往く現時農村問題

乃松丁抹の農村其の教育

孫大谷光瑞著

農學博士小野武夫著

中島九郎述

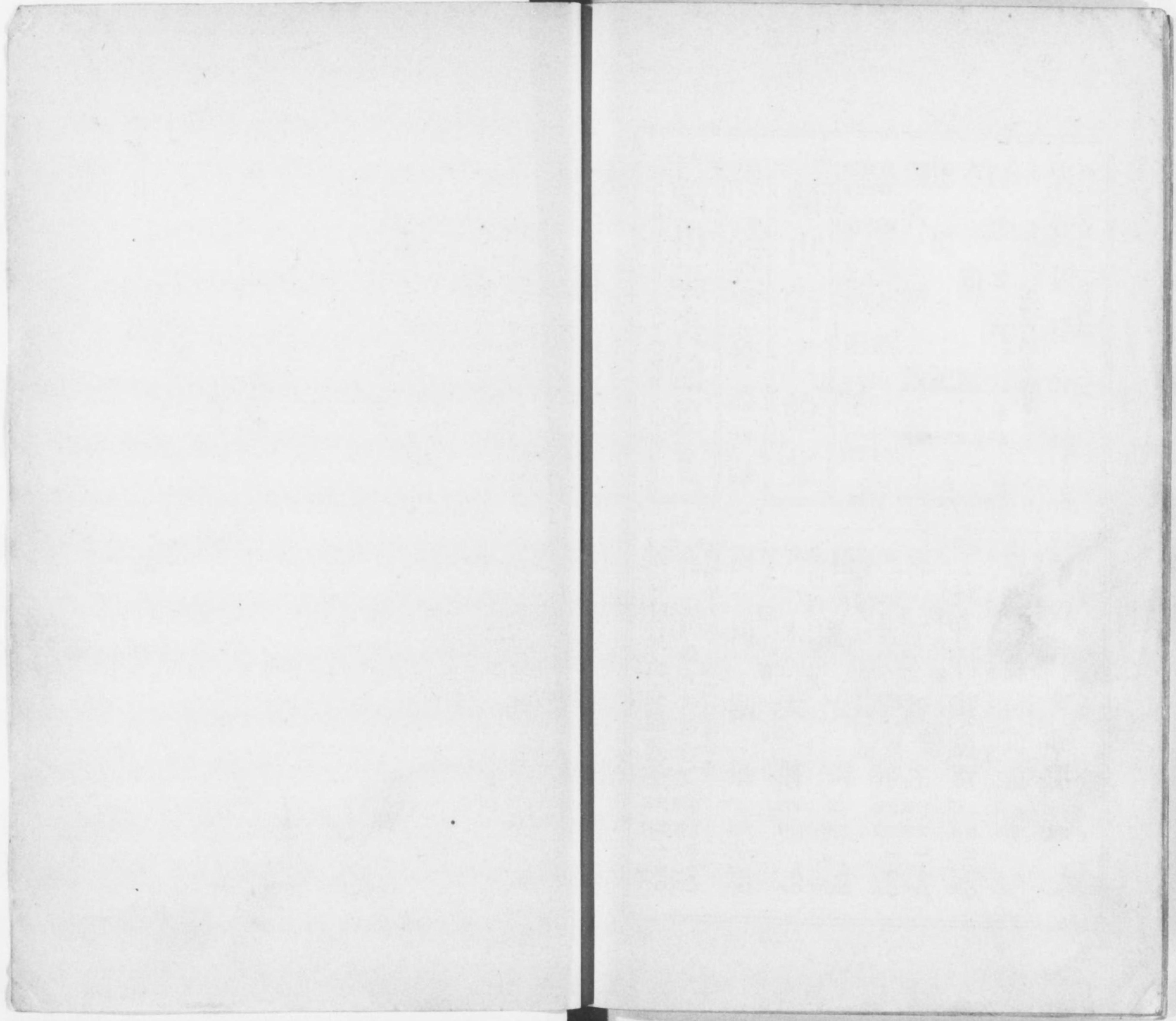
送定料價

二〇〇

乃松丁抹の農村其の教育

孫大谷光瑞著

<p





384

43

終

